

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2005～2008

課題番号：17320009

研究課題名 (和文) 計算の哲学——その展開と深化

研究課題名 (英文) Philosophy of Computation --- developments and explorations

研究代表者

三好 博之 (MIYOSHI HIROYUKI)

京都産業大学・理学部・教授

60286135

研究成果の概要：

計算の哲学における形而上学的な枠組みである HBF-1, 2, 3, それに, 現象在, 因果的超越, 制度的切断, 治療的理解, を見いだした. それに基づいて時間論を議論した. ダメット, フレーゲ, ウィトゲンシュタインの文献に計算を見いだした. またカントにおける計算, スコーレムにおける計算を見いだした. フランス現代思想をベースにした生命論的な議論から計算を捉えた. また西田哲学との関連を見いだした. てんかん, デジャヴュ, 統合失調症における時間概念を計算的に捉えた.

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	2,800,000	0	2,800,000
2006 年度	2,600,000	0	2,600,000
2007 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	10,700,000	1,590,000	12,290,000

研究分野：計算の哲学

科研費の分科・細目：哲学

キーワード：計算の哲学, 生命, 形而上学, 圏論, フレーゲ, カント, スコーレム, てんかん

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは, 三好を研究代表者, 戸田山, 郡司, 檜垣を研究分担者として平成 15.16 年度に科学研究費補助金, 基盤研究 B(1)「計算の哲学——計算概念の原理的再構築」(課題番号 15320007, 研究経費 530 万円) による補助を受けている.

2. 研究の目的

本研究は, 哲学, 数学, 計算機科学, 認知科学, 生命科学, 社会科学など様々な分野でしばしば無反省に用いられる「計算」という

概念を問い直し, それを通じて各分野においてこれまで明らかでなかった問題を浮彫りにした上で, そこから新しい哲学研究の潮流を産み出すことを目的とした. この研究プロジェクトは平成 12 年に開始され, これまで三好, 戸田山, 郡司, 檜垣, 塩谷を中心に進めてきたが, 幸い多くの賛同者を得ることが出来たため活動の規模を拡大し, 今後 4 年間で日本をこの分野の研究における国際拠点の一つとすることを目指した.

なお本研究には上野修 (大阪大学), 入不二基義 (青山学院大学), 塩谷賢, 小川芳範

(慶應義塾大学)の4名の研究協力者が参加した。

4. 研究成果

2005年度：数理的な方向としては、金子はマイケル・ダメットの反実在論の論証がいかなる論証であるかを、表出論証を中心に解明し、その背後にある改訂主義がいかにして成立しうるかを明らかにした。また白旗はゲーデルのダイアレクティカ解釈を線形論理化するという研究を継続して行った。岡本は線型論理の乗法的な論理演算子の持つ動性について考察を行った。歴史的な方向としては、出口はスコレームとヒルベルトの著作の読解と分析を行い、計算数学の歴史的な展開を、スコレームの数学思想を軸に考察した。科学哲学的な方向としては、戸田山は科学理論に対するモデル論的なアプローチ (semantic conception of theories) を採った場合に数学の科学理論に対する適用可能性の議論がどのような変容を被るかを研究し、その中で計算の果たす役割について考察した。また、三好は物理学との連関について予備的な考察を行った。超越論的な方向としては、檜垣は西田やドゥルーズなどに関する生命の哲学に関する研究を進めるとともに、とりわけ、これらの議論と共同体論・政治的倫理的思考との関連を検討し、フーコーの生権力論について考察した。また、三好は計算の哲学の概念装置と時間論との関わりについて論考をまとめた。さらに時間論と精神医学に関わる方向としては、深尾は精神発作（てんかん発作症状としての精神現象）としてデジャヴが起こることに注目し、精神的時間の失調としてのデジャヴのメカニズムを明らかにしようと試みた。また郡司は大阪大学の石黒教授と共同してデジャヴの体験装置構築とその実験を行った。生命論の方向としては、郡司は、部分を貼り合わせて全体をつくるという操作に関する、動的な糊といったモデルの構築、および粘菌ロボットの実装：データ・プログラムの区別が担う齟齬を強調した生体マテリアルの計算資源としての利用、といった研究を行った。

2006年度：金子は、フレーゲの「意義」およびダメットの「意義」概念の比較を通して、「意義」が何であるかの解明を行い、算術では、計算概念に焦点を合わせることによって両者の「意義」をうまく一致するように解釈できること、そうした「意義」がかなり構成主義的であることを見いだした。岡本は、言語哲学的な意味概念、数学的な計算概念、論理的な証明概念、という三者の関係を、特に文脈原理の考えを基盤に据えつつ再検討した。出口は、十八世紀の数学者フォン・ゼーグナーの著作を集中的に精査することで、カント数学論における「構成」概念の誕生

に関する重要な知見を得た。白旗は、直観主義的高階論理の圏論的モデルであるトポスでの様々な構成を、細かく見直す作業をおこなった。これと並行して、個体を相互作用の場（ゲーム）として理解し直す、という着想を深めた。三好は物理学との連関について引き続き予備的な考察を行った。檜垣は、現代フランス哲学の方向から、そのメタフィジックの構造の解明につとめ、とりわけ、身体論・時間論・精神論・制度論への施行を深めた。深尾は脳の突発的な機能障害としてのてんかん発作による精神病理現象を分析することによって「生きられる時間」の構造を明らかにするべく、研究を進めた。戸田山は、数学的プラトニズム、数学的唯名論と数学の実践のダイナミックな関係について考察を行った。また、発生的視点を進化、遺伝についての哲学的諸前提に導入した場合にどのような実り豊かな帰結をもたらすかについて考察した。郡司は、束、層、力学系などを用いた生命と創発のモデル化について論じ、また粘菌を用いた様々な実験を行った。さらに視覚システムにおけるノイズとパターンの相互作用、先読みリーチングによる主観的時間の変質、ニューラルネットワークにおける否定と共立、の研究を行った。

2007年度：金子は、第一にフレーゲとブラウワーにおける証明概念の比較研究、第二に、ダメットの Undecidability という概念を軸にして、反実在論のプログラムにおいて計算の概念がどのように作用しているかの解明を行った。戸田山は、ゲーデルについて、そのテキストを通時的に辿ることによって、彼の「プラトニズム」が脱神話化できることを示した。またラッセルについて、パラドクスの発見から『プリンキピア・マテマティカ』に至る発展の中で、「置き換え理論」が果たす役割を明らかにした。岡本は、自然と言語の双方にまたがる「相互作用」「プロセス」の概念を確立すること、特に、そうしたプロセスのうちに成立するシンボリック「表現」関係の分析を行い、その哲学的含意を明らかにした。白旗は、第一に、クライゼルの無反例解釈についてのサーベイを行った。第二に、高階アフィン論理の体系から、直観主義論理でのトポスにあたるようなものが構成できないか考察した。三好は計算と物理学・時間論との関わりについて考察を行った。出口は物理学、言語学、心理学、経済学といった個別科学の内実に踏み込んだ数理科学の研究、華厳思想に関連する東洋の古典思想・現代哲学に対する現代論理学の観点からの分析を行った。郡司は、論理的矛盾を柔軟に回避したシステムを力学系で表現し、それが階層間相互作用を実現しながら、同時に階層の独立性を担保することを示した。檜垣は、研究に関しては、従来行ってきた、フランス現代思想

をベースにした生命論的な議論を考察し、特にそれを生政治学などの権力論的な方向に広げながらいくつかの成果を問うた。深尾は、てんかん発作における意識障害と解離ないしヒステリーにおけるそれを比較して、そのメカニズムの異同について分析し、この理論の妥当性および将来的可能性について検討した

2008年度：金子は、計算理論の草創期の文献およびダメットの著作を検討し、その一方でフレーゲおよび初期ウィトゲンシュタインの数学論を素材に分析を進めた。出口は18世紀ドイツの算術に関する書物に登場する18世紀的「計算」と、カントの「構成」としての計算概念の比較検討を試みた。その結果、カントの計算概念の背景について従来のカント研究の了解を覆すいくつかの成果が得られた。檜垣は、生命の哲学の歴史をおいながら、生命概念と計算概念とのつながりからむ哲学的内容を提示した。白旗は、部分構造論理のクリプキモデルの圏での部分対象について調べた。その成果として、対象領域が各可能世界で同一であるような対象の部分対象に関しては、通常の対応がそのまま成り立つことがわかった。岡本は、シークエント計算の一般化として新しい体系Mを開発し、その様相解釈を構成した上で、ここに含まれる哲学的含意を考察した。郡司は、オートマトンによる数値計算や、束・商束による二重性を実装した数理モデルによって、認知的時間や対称性バイアスなどを理解することを行った。その成果として、境界の脆弱なアメーバモデルによって、いわゆる最適計算と探索のジレンマが解決できた。束・商束による二重性モデルによって、対称性バイアスなどの認知判断や、時間における因果関係知覚の逆転などが説明できた。深尾は、てんかんにおける精神病理現象の記述と科学的・哲学的分析を行った。そして、てんかん患者における社会認知機能の障害、てんかん患者における精神発作と認知機能の関連、てんかん患者におけるいわゆる心霊現象とてんかん発作との関係を分析し、それぞれに新たな知見を得た。三好は、これまでの成果である計算の哲学のための形而上学的概念装置適用した時間論をさらに発展させ、形而上学および具体的音楽論に発展させた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 55 件)

1. 出口康夫, 電子はいつから実在するようになったのか, アルケー (関西哲学会年報), 査読有, 17, 2009
2. 出口康夫, 真理対応説の擁護: 実在論と

ロバストネス, 日本カント研究, 査読有, 10, 2009

3. 深尾憲二郎, 神秘的・心霊的現象としての癲癇発作, 臨床精神病理, 査読無, 30(1), 2009, 84-85
4. 金子洋之, 対象としての数—フレーゲの数とウィトゲンシュタインの数, 現代思想, 査読無, 36 卷 14 号, 2008, 163-173
5. 出口康夫, 理論と実験—揺らぐ二項対立, 『科学/技術の哲学』(岩波哲学講座第9巻), 査読無, 9 卷, 2008, 39-63
6. 出口康夫, 活動実在論の擁護—光速度の測定に即して, 中才敏郎・美濃正編『知識と実在』(世界思想社), 査読無, 2008, 4-46
7. 出口康夫, 真矛盾主義的一元論 (上), 哲学研究, 査読有, 585, 2008, 36-60
8. 出口康夫, 真矛盾主義的一元論 (下), 哲学研究, 査読有, 586, 2008, 24-56
9. Yasuo Deguchi, et al., Ways of Dialetheist: Contradictions in Buddhism, Philosophy East and West, 査読有, 58-3, 2008, 395-402
10. Yukio-Pegio Gunji, et al., Abstract heterarchy: Time/ state-scale re-entrant form, Biosystems, 査読有, 91(1), 2008, 13-33
11. Yukio-Pegio Gunji et al., Minimal model of a cell connecting amoebic motion and adaptive transport networks, J. Theor. Biol., 査読有, 253, 2008, 659-667
12. 郡司 ペギオ-幸夫, 他, 認知的誤謬の起源: アドホック論理と対称性バイアス, 認知科学, 査読有, 15(3), 2008, 442-456
13. 深尾憲二郎, てんかんと非定型精神病, 林拓二 (編著) 『非定型精神病: 内因性精神病的分類と診断を考える』, 査読無, 2008, 13-17
14. 檜垣立哉, 細胞の自己・細胞の他者, 『現代思想』青土社, 36 卷 8 号, 2008, 194-207, 査読無
15. 檜垣立哉, 見者の時間, 『思想』岩波書店, 1009 号, 2008, 149-165, 査読無
16. 檜垣立哉, パラドックスとユーモアの哲学, 『現代思想』青土社, 36 卷 15 号, 2008, 176-185, 査読無
17. 檜垣立哉, 生命と微分, 日本の哲学 昭和堂, 第9巻, 2008, 37-51, 査読無
18. Yukio-Pegio Gunji, Kazauto Sasai and Sohei Wakisaka, Abstract heterarchy: Time/state-scale re-entrant form, Biosystems, 査読有, 91(1), 2008, 13-33
19. 深尾憲二郎, てんかんとヒステリーにおける「意識」と「意志」—機能的階層論の可能性, こころの科学, 査読無, 137(1), 2008, 2-9
20. 金子洋之, ブラウワー哲学再考, 生田哲学, 査読有, 11, 2007, 34-45

21. 金子洋之, ゲーデルと直観主義, 『現代思想』2月号臨時増刊 総特集ゲーデル, 35巻3号, 2007, 138-148, 査読無

22. 岡本賢吾, なぜ意味論は「プロセス」を含むか——表示の意味論・領域理論をめぐる, 科学哲学, 査読有, 第40巻2号, 2007, 23-39

23. 岡本賢吾, 編者解説, 岡本賢吾・金子洋之編『フレイゲ哲学の最新像』(勁草書房, 2007年2月, 374頁), 2007, 343-365, 査読無

24. Yukio-Pegio Gunji, Kazuto Sasai and Masashi Aono, Return map structure and entrainment in a time-state-scale re-entrant system, *Physica D: Nonlinear Phenomena*, 査読有, 234(2), 2007, 124-130

25. 郡司ペギオ幸夫, 情報リアリズムが内在する情報単位の解体, 情報の科学と技術, 査読有, 57(5), 2007, 244-248

26. 郡司ペギオ幸夫・塩谷賢, なぜよけいなことを考えるのか—量子もつれ・セレンディピティー・生命の時間, 現代思想, 査読無, 35(16), 2007, 166-182

27. 郡司ペギオ幸夫, 情報リアリズムが内在する情報単位の解体, 情報の科学と技術, 57・5, 2007, 1-5, 査読無

28. 白旗優, 無反例解釈についての覚え書き, 慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集, 査読無, 2007, 541-553

29. 檜垣立哉, 永遠の現在 ドゥルーズの時間論(2), 思想, 岩波書店, 査読無, 998号, 2007, 92-105

30. 檜垣立哉, 西田幾多郎と生の哲学, 西田哲学会年報, 査読無, 4, 2007, 39-54

31. 檜垣立哉, 生殖と他者 レヴィナスを巡って, 実存思想論集 レヴィナスと実存思想, 査読無, 22, 2007, 29-50

32. 檜垣立哉, 第三の時間について——ドゥルーズの時間論(1)——, 思想, 994号, 2007, 4-20, 査読無

33. 深尾憲二郎, てんかんと解離, 精神科治療学, 査読無, 22(4), 2007, 387-394

34. 深尾憲二郎, てんかんを通してみたところのかたち, ところの臨床アラカルト, 査読無, 26(2), 2007, 255-261

35. 深尾憲二郎, デジャヴと自己—既知性・類似性・同一性, 臨床精神病理, 査読無, 28(1), 2007, 67-68

36. 戸田山和久, 「ゲーデルの数学的プラトニズム」とは何か, 『現代思想』2月号臨時増刊 総特集ゲーデル, 35巻3号, 2007, 118-137, 査読無

37. 出口康夫, ゲーデルとスコレーム—「完全性定理」をめぐる—, 『現代思想』2月号臨時増刊 総特集ゲーデル, 35巻3号, 2007, 164-178, 査読無

38. Hiroshi Kaneko, Undetachability of

propositional content and its process of construction—Another aspect of Brouwer's Intuitionism, *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol.11, No.1, 2006, 27-39, 査読有

39. Yukio-Pegio Gunji et al., Dynamical duality of type- and token-computation as an abstract brain, *Chaos, Solitons & Fractals*, 27(5), 2006, 1187-1204, 査読有

40. 戸田山和久, 何でこんなヘンテコな記号を覚えなくちゃいけないんですか?—論理学(教育)と人工言語, 『言語』, 35巻11号, 2006, 29-35, 査読無

41. Yasuo Deguchi, Break philosophy through internally, *Topoi*, Vol.25, No.1-2, 2006, 33-38, 査読有

42. Masaru Shirahata, The Dialectical interpretation of first-order classical affine logic, *Theory and Applications of Categories*, Vol.17, 2006, No.4, pp 49-79. 査読有

43. 檜垣立哉, 「人間」が解体される場所, ちくま, 423号, 2006, 14-15, 査読無

44. 檜垣立哉, ドゥルーズとメルロ＝ポンティ, メルロ＝ポンティ研究, 10号, 2006, 19-32, 査読有

45. 檜垣立哉, 顔の彼方の生, 哲学雑誌, 121巻793号, 2006, 81-99, 査読有

46. 檜垣立哉, 身体の何が構築されるのか, 『現代思想』10月臨時増刊 総特集ジュディス・バトラー, 34巻12号, 2006, 108-115, 査読無

47. 檜垣立哉, <生の哲学>における身体・空間論の展開, 年報人間科学, 第27号, 2006, 査読有

48. 深尾憲二郎, 意識と自由意志: 癲癇発作の分析から, 臨床精神病理, 27・1, 2006, 53, 査読無

49. Yukio-Pegio Gunji et al., Principles of Biological Organization: Local-Global Negotiation Based on "Material Cause", *Physica D*, Vol.219, 2006, 152-167, 査読有

50. 三好博之, 計算の哲学から見た時間, 京都産業大学論集 人文科学系列, 第35号, 2006, 55-70, 査読有

51. 戸田山和久, 分析哲学はいかにして分析哲学でなくなったか, 『現代の哲学: 西洋哲学史二千六百年の視野より』哲学史研究会編, 昭和堂, 2005, 95-117, 査読無

52. 戸田山和久, 自然主義的認識論と科学の目的, 哲学雑誌, 120巻792号, 2005, 51-87, 査読有

53. 出口康夫, 臨床からの問い—「統計学の哲学」序説—, 京都大学文学部研究紀要, 第44号, 2005, 41-84, 査読有

54. Kenjiro Fukao, et al., De ja Vu and Jamais Vu as Ictal Symptoms: Qualitative Comparison with those Occurring in Normal Subjects Using a Questionnaire, *Epilepsia*, 46 (suppl. 3), 2005, 28, 査読有
55. 深尾憲二郎, デジャヴュのクオリア, 臨床精神病理, 26(1), 2005, 66, 査読無

[学会発表] (計 35 件)

1. 三好博之, なぜ計算を考えるのに形而上学が必要なのか, 本郷メタフィジクス研究会, 2009/03/31, 東京大学本郷キャンパス
2. 出口康夫, 華厳算術: 義湘バージョン/場の論理の再構築に向けて, 比較思想学会近畿部会第 14 回例会, 2009. 3. 21, 仏教大学
3. 三好博之, 計算のとらえどころのなさをどうとらえるか (2009 年版), 平成 20 年度第 3 回内部観測研究会, 2009/03/16, 沖縄県青年会館
4. 深尾憲二郎, てんかん患者における精神発作と認知機能の関連についての研究, てんかん治療振興研究財団第 20 回研究報告会, 平成 21 年 3 月 6 日, 大阪
5. 出口康夫, 現代論理学から見た東洋哲学, 土井道子記念京都哲学基金主催シンポジウム, 2008. 12. 16, 京都ガーデンパレスホテル
6. 出口康夫, 真理対応説の擁護: 実在論とロバストネス, 日本カント協会第 33 回大会, 2008. 11. 15, 九州大学
7. 岡本賢吾, 他, 数学に於ける変数(2), 日本科学哲学会第 41 回大会, 2008 年 10 月 18 日, 福岡大学
8. 岡本賢吾, ワークショップ「論理的推論の生成」提題, 哲学会第 46 回大会, 2008 年 10 月 25 日, 東京大学
9. 深尾憲二郎, てんかんと社会認知, 第 42 回日本てんかん学会, 平成 20 年 10 月 18-19 日, 東京
10. 出口康夫, 電子はいつから実在するようになったのか, 関西哲学会第 61 回大会, 2008. 10. 12, 九州大学
11. 檜垣立哉, Le "tournant" dans l'interprétation deleuzienne de Bergson, ベルクソン国際学会, 2008 年 10 月 10 日, 法政大学
12. 深尾憲二郎, 神秘的・心霊的現象としての癲癇発作, 第 31 回日本精神病理・精神療学会大会, 平成 20 年 10 月 2-3 日, 東京
13. 出口康夫, 応用哲学宣言, 応用哲学会設立総会公開シンポジウム, 2008. 9. 7, 名古屋大学
14. Masaru Shirahata, The subobject classifier in the category of presheaves over an so-monoid, SLACS/ALGI 2008, 2008. 8. 27-29, 鹿児島大学
15. Kengo Okamoto, Why Read Frege from Construtivist Viewpoint?, Workshop on

Constructivism: Logic and Mathematics, 2008. 5. 29, JAIST

16. 檜垣立哉, 偽なるものの力, 日本記号学会, 2008 年 5 月 10 日, 京都大学
17. Yasuo Deguchi and Katsuhiko Sano, On Kegan Arithmetic, An International Conference on Analytic Philosophy and Asian Thought, 2008. 3. 18, Kyoto University
18. 出口康夫, 活動実在論の擁護—光速度の測定に即して—, 京都科学哲学コロキウム, 2008. 1. 27, 京大会館
19. 出口康夫, In Defence of Agent Causation Revisited, 科研研究会, 2007. 12. 20, 東大文学部
20. 檜垣立哉, 生命と微分, 土井道子記念会 (日本哲学史フォーラム), 2007 年 12 月 19 日, 京都大学
21. 出口康夫, 生成文法を経験科学化するとはいかなることか?, 日本認知科学会 2007 年冬のシンポジウム「科学方法論から生成文法を見る」, 2007. 12. 8, 京都大学
22. 郡司ペギオ幸夫, 創発の種としての触覚, 第 3 回触覚シンポジウム, 2007 年 12 月, 名古屋大学
23. Yasuo Deguchi, Needs for Methodologies: from Minimum-pluralistic Perspectives, Workshop I: Progress in Generative Grammar: Its Characterization and Assessment, The 17th J/K Linguistics Conference, 2007. 11. 10, UCLA
24. 檜垣立哉, Le vitalisme de Bergson et son contexte, ベルクソン『創造的進化』刊行百周年記念国際シンポジウム, 2007 年 10 月 20 日, 京都大学
25. 出口康夫, From Prediction to Prognosis, 経済学勉強会, 2007. 10. 27, 京大会館
26. Yukio-Pegio Gunji, Taichi Haruna, Tomohisa Shirakawa, Life driven by Damaged Damage, International Symposium: What is Life?, 9-13, October, 2007, Kyoto
27. 深尾憲二郎, 機能的階層論と意志の主体 — 癲癇とヒステリーの比較から, 第 30 回日本精神病理・精神療学会大会, 平成 19 年 10 月 4-5 日, 倉敷
28. 出口康夫, In Defence of Agent Causation, 日本心理学会第 71 回大会 ワークショップ「心理学における因果論の役割」, 2007. 9. 19, 東洋大学
29. Masaru Shirahata, The subobject classifier in higher-order affine logic, 第 18 回 ALGI 研究集会, 2007 年 9 月 3 日, 鹿児島大学
30. 郡司ペギオ幸夫, 生命号, 日本進化学会第 9 回京都大会ワークショップ「意識の進化」, 2007 年 9 月 2 日, 京都大学吉田キャ

ンパス

31. 郡司ペギオ幸夫, 時間論における A 系列と B 系列の相互作用, 時間論研究会, 2007 年 8 月, 山口大学時間学研究所
32. 郡司ペギオ幸夫, オートポイエシスを超えて, 第 1 回 SIG-NAC 研究会「生命とは何か? 計算とは何か?」, 2007 年 7 月, 国際高等セミナーハウス
33. Yasuo Deguchi, The Transcendental Character of Scientific Evidence: A Study on Probability Theory and Statistical Test, ANU-Sydney-Kyoto Probability Workshop, 2007.6.30, The University of Sydney
34. Yasuo Deguchi, Conventional Truth and Contradiction in Later Nishitani Workshop on Ultimate Truth and Conventional Truth, 2007.6.26, Melbourne University
35. 郡司ペギオ幸夫, セル・運動と知能を担う細胞体, インターコミュニケーションセンター, 2007 年 6 月, 東京

[図書] (計 11 件)

1. 郡司ペギオ幸夫, 講談社, 時間の正体, 2008, 262
2. 檜垣立哉, 河出書房新社, 賭博/偶然の哲学, 2008, 179
3. 小泉義之, 鈴木泉, 檜垣立哉, 編者, 平凡社, ドゥルーズ/ガタリの現在, 2008, 722
4. 鷲田清一編, 檜垣立哉, 他著, 中央公論新社, 『哲学の歴史 12 巻』「ベルクソン」の項, 2008, 48-122
5. 志水宏吉・小泉潤二編者, 檜垣立哉, 他著, 有斐閣, 実践的研究のすすめ, 2007, 310
6. 田中一之, 白旗優, 他, 東京大学出版会, ゲーデルと 20 世紀の論理学 第 3 巻 不完全性定理と算術の体系, 2007, 284
7. 飯田隆編 金子洋之, 岡本賢吾, 戸田山和久, 他著, 中央公論新社, 哲学の歴史 第 11 巻——論理・数学・言語, 2007, 750
8. 田中一之, 渕野昌, 松原洋, 戸田山和久, 東京大学出版会, ゲーデルと 20 世紀の論理学 第 4 巻 集合論とプラトニズム, 2007, 305
9. 菅野盾樹編者, 檜垣立哉, 他著, 世界思想社, レトリック論を学ぶ人のために, 2007, 252
10. 金子洋之, 勁草書房, ダメットにたどりつくまで, 2006, 242,
11. 檜垣立哉, 河出書房新社, 生と権力の哲学, 2006, 252

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三好 博之 (MIYOSHI HIROYUKI)
京都産業大学・理学部・教授
研究者番号: 60286135

(2) 研究分担者

金子洋之 (KANEKO YOUJI)
専修大学・文学部・教授
研究者番号: 60191988

岡本賢吾 (OKAMOTO KENGO)
首都大学東京・都市教養学部・教授
研究者番号: 00224072

戸田山和久 (TODAYAMA KAZUHISA)
名古屋大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号: 90217513

郡司幸夫 (GUNJI YUKIO)
神戸大学・理学部・教授
研究者番号: 40192570

白旗優 (SHIRAHATA MASARU)
慶應義塾大学・商学部・准教授
研究者番号: 00286618

出口康夫 (DEGUCHI YASUO)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 20314073

檜垣立哉 (HIGAKI TATSUYA)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号: 70242971

深尾憲二郎 (FUKAO KENJIRO)
京都大学・大学院医学研究科・助教
研究者番号: 60359817

(3) 連携研究者